

講演

STスポット・ダンスシリーズにおける活動と創造支援

岡崎 松恵

STスポットは、横浜にある小劇場です。56㎡の空間に間口三間×奥行二間半の舞台を作ると、客席数わずか60席。ダンスには極小のスペースですが、1997年よりこれからの才能を支援する「STスポット・ダンスシリーズ」を開催しています。このシリーズは、公募のショーケース「ラボ20」を入口に、単独公演、セレクションとステップアップ方式のプログラムになっています。今日は若手の活動ということで、ラボ20の参加作品から、20代から30代のアーティストたちの活動を紹介します。

ラボ20は、持ち時間20分の身体表現のラボラトリー（実験室）の意味で、第一線のアーティストが公演全体をデザインするキュレーターとなり、上演作品をオーディションで選考し、創作プロセスに関わりながら作品の成長をサポートするという公演プログラムです。応募は各回全国から40前後ありますが、キュレーターは毎回変わりますので、常に新しいアーティストや作品が登場することになります。オーディションでは年間80組の作品を見ることになるのですが、私にとっても半数は初見で、ここ数年でダンスの裾野が大きく広がったと実感しています。

最初は、丹野賢一さんのキュレートによる「ラボ#9」の参加作品、手塚夏子の『私的解剖実験』です。この作品はトヨタアワードほか同じタイトルで上演が重ねられているのでご存じの方も多いのではないかと思いますが、これはこのシリーズの初演作です。手塚さんは33歳、バントマイムを学んだのち、マイムとダンスの領域を行ったり来たりしながらソロ作品を発表し、ニブロールのダンサーとしても活動しながら、2000年本作品からソロ活動を本格的に開始しました。

手塚さんのダンスは、「私的解剖実験」のタイトルにあるように、自分の身体を素材に知覚の隅々を掘り起こすような実験を繰り返すことで、自分なりの動きを見つけだそうとしています。初演のラボではまだ身体の一部ですが、目の裏側の筋肉とか、中指の爪の裏側とか、普段私たちが気に止めない部分に執拗にこだわっています。いわゆるダンサー的な動きはなく、観客はただただ手塚さんが身体の内側に集中している姿を見つめ続けることになるのですが、そこには明確な表現の根拠を見ることができません。

こうした追求の方法は、次の大倉摩矢子さんにもいえます。これは、山崎広太さんキュレートによる「ラボ#13」参加作品、『なんでもあり』という即興のソロ作品です。彼女は26歳、大学生のときENBUゼミナールで大森政秀さんと出会ったことがきっかけで舞踏を始め、2000年から大森さんのカンパニー作品に参加、2002年これが初の劇場におけるソロ作品です。

彼女のダンスの特徴は、最近の若いダンサーにはまれな強い軸のある身体です。身体の構造に対する研究心が旺盛で日頃の鍛錬も熱心に取り組んでいますが、できるだけ無駄を削ぎ落として、自分の身体の中にある知覚をもとに表現を立ち上げようとしている点で手塚さんと共通のものがあります。たとえば、知覚神経を触覚みたいに出していく時間（例えば足の裏をすごく気を付けて歩行するというようなことによって出てくる）、タメとカタムキが持続して成立して出来る即興、そういったことに強い興味をもって作品を作っています。

次は舞踏を出発点にしながら、大倉さんとは全く異なる展開を行っている「金魚×10」です。主宰の鈴木ユキオさんは1997年アスベスト館を経て、若衆、大豆鼓ファーム、サルヴァニラに所属し、2000年より自己のグループを率いながら、ソロ活動も意欲的に行っています。金魚は鈴木さんのプロジェクトカンパニーといったもので、作品ごとにさまざまな個性のメンバーを集めて、おもちゃ箱のようにいろんなものが飛び出し、世界にゆらゆらおよいでいく金魚みたいな、ということからグループ名がつけられました。2002年1月山下残さんキュレートの「ラボ#14」参加作品、「空気の底、身体の色」です。

この作品では、役者や美術家、ダンサーなど8人のメンバーから出てきた動きを組み合わせで次々と異なるトーンの場面を展開していきます。複雑な構成とその展開の早さは、交錯する都市の一面を思い起こさせます。このようなゆるやかなカンパニーのあり方は今後主流となると思うのですが、次々と新しい魅力を開発していく可能性がある反面、メンバー全員に技術を洗練させて作品の精度を高めていくことが難しいという課題があります。

次は、20代前半のデュオグループ、新舗美佳さ

んと福留麻里さんの「ほうほう堂」です。ダンス教室で一緒だったことがきっかけで結成されました。「ラボ#13」で上演した「ホーホー注意報」です。

おそろいの赤い服でポーカージェイス、小さな体から生まれる独特な動き、ちぐはぐしたやり取りなど、いまどきのかわいいダンスに括られてしまいそうですが、ここ1年間で急成長したグループです。微妙な人間の関係性や日常のズレにこだわった細心の振付、音に対するセンスのよさ、空間を把握する力もあって、作品全体に日常のあわいといった、まったくと流れる独特な時間を作り出しています。これからが期待できるグループのひとつです。

これまではみなさん舞台経験を積んでラボに参加した人たちですが、このシリーズにはダンスの技術的な訓練もあまりなく初めての舞台という人々も登場します。次は武田信吾さん25歳、テレビで白虎社の物まねを見たのがきっかけでダンスに興味を持ち、大駱駝鑑のワークショップに参加し、「ラボ20#14」で初めてのソロ作品を発表しました。

タイトルは『9』。宇宙にひとりぼっちの僕という設定ですが、そこはやたら現実的な世界で、広いはずの宇宙はSTの間口6メートルに過ぎず、友人に出会ったりもします。こうした自分を取り巻く空間で起きるさまざまな出来事（彼の語りによると）に突発的に激しく反応する言葉と体、それがあらぬ方向へ展開し観客の笑いを誘います。ただ彼の言葉と不器用な動きの中に、何か生きることや今いることやその場所に対する違和感や不全感のようなものを彼がなんとかしようとしていることを感じさせるパフォーマンスでもありました。それを明るく笑い飛ばすところがある。これは若い世代が共通に持っている感覚で、同世代の観客から多くの共感を得た舞台でした。

以上、5つの作品から、現在のコンテンポラリーダンスの多様な表現のありようが見てとれるのではないかと思います。形態としては圧倒的にソロが多く、STのダンスシリーズの9割は自作自演です。これはSTスポットが小さな空間だからということだけではなく、日本の若手のコンテンポラリーダンス全体の傾向でもあって、彼らの置かれている創造環境と関係があります。ダンサーの半分は舞踊研究所でダンスを学び独立した人ですが、もう一方は演劇やマイム・美術など他の表現ジャンルから身体に興味を持ってダンスのワークショップに参加し、ダンスの創作を始めたといったケースです。出発点がひとりであること、その出発点として自分の身体、経験や感覚から作品を作ろうしていること、そして経済的な状況もあると思います。

こうした孤独な環境の中で、ダンサーたちが自分のイメージを具体化する適切な方法を見つけることは容易なことではありません。そこで、STスポット・ダンスシリーズでは、途中経過を公開するディスカッション、リハーサル、公演まで、出演者がキュレーターやスタッフなどの第三者と対話する機会を作っています。キュレーターとなるアーティストは同様の体験を持った先輩として舞台の傍らに立ち、出演者がなんとか自力でその道を抜け出すのを見守り、少しだけ手助けをします。その作業の多くは、問いかけです。作品のコンセプト、場面の意味、音・衣装・道具などのチョイスなど、現場では実に細かい質問が飛び交い、そうした対話の中から、出演者は自ら作品の根拠を明確にするきっかけを得たり、これまで気が付かなかった自分の魅力を再発見したり、ダンスに向かう姿勢を考えたりするのです。その他、運営上でもいくつかの工夫をしています。

- ・ 事前審査はなく、応募者全員がオーディションに参加する。
- ・ キュレーターは審査基準と採否の理由を応募者全員に伝える。
- ・ すぐれた作品を上演したアーティストに「ラボ・アワード」を授与し、次の作品発表の場を提供する。

先に紹介したアーティストは、いずれもラボ20を通していろいろな発見をして、次のステップに繋がりました。

いま若手の成長と考えるとき、継続的な活動ができる、展望が見える、刺激しあえる仲間がいるということが重要だと思っています。STスポットも、セッションハウスもダンスボックスもそうした支えあう仕組みをもって、日本のコンテンポラリーダンスの基礎的な部分を担っているのではないかと思います。

* 本稿は、第55回舞踊学会「ダンスシーンから見た若者文化」（2003年12月6日）の講演内容を再構成したものである。

* 筆者は1987年よりSTスポット館長を務め、1994-2003年「STスポット・ダンスシリーズ」のプロデュースを担当。2004年1月より、歴史的建造物を活用したアートスペース BankART1929の館長に就任。